The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

母殺しオレステスの弁明

——アイスキュロス『供養する女達』後半の舞台——

小澤　克彦

はじめに

本稿は,「人間というもの，ないし人間の生きる在り方」ということを，ギリシア悲劇がどのように表現し，いかなる問題を見せてくるか，ということをテーマとする私の一連の悲劇研究の一つである．その時，私はこれまでも常に，それは上演された「舞台」として見ていこうとしてきた．言うまでもなく，ギリシア悲劇は「舞台」だったからで，それが私のギリシア悲劇への根本的な接近の仕方である．そして，それは更にまた,「初演時」観客は何を観せられていたのか，という形で追求しようとしてきた．つまり，まだ舞台展開がどうなるのかの予備知識，ないし先入観のない観客にたいして提示された舞台として見ようということで，それは「作者の意図」そのものを純粋に問題にしようということからであった．もちろん，演劇というのは「演出」によってその舞台は大きく変わり，とりわけその内容の解釈，思想性は同じ戯曲によるとは思えないほどの違いを見せてくることもまれではない．そこでの私のやり方は，手許にあるテキストが字句通りに素直に上演されたとして，その舞台が示してくる内容はいかなるものになるか，という形で問題を立てることにする．ただ，ギリシア悲劇は一つの「詩」でもあり「歌舞」でもあり，その「詩的効果」や「音楽・舞踏効果」，あるいは演劇における「様式性」，とりわけ「コロス」のありよう，また「音響，衣装，大道具，小道具など舞台での効果物」なども問題になるのであるが，それらはここではとりあえず問わないことにす

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

る．

テキストとしてはO. C. T. のペイジによる新版を基本とするが，もともとマレイの旧版を使用していたので，それも参照する．なお本文での「訳」は私の訳で示すが，必ずしも戯曲的な訳ではなくむしろ直訳に近い．

これまでのいきさつ

ところで，ここで問題にしようとしている『供養する女達』の，その前半の舞台についてはすでに先行論文でその問題性を示しておいた[1]．それ以前にもちろん，この舞台に先立つ『アガメムノン』の舞台についてもその理解を示してある[2]．本稿はそれらを承けつつさらに第三部の『恵みの女神達（エウメニデス）』に続けるものとなる．あらためて言うまでもないことではあるが，以上の三作品は「三部作」であって，三つの作品全体を通して一つの「貫通主題」があり，三つで一つの舞台となるという性格をもっている．従って，これを解釈したり，いわんや上演しようとした時には「一人」の人間によって解釈，演出されるのでなくてはならない．古典学の世界では，翻訳も注解も別の研究者の手になっていることが多いように，これらは「文献学」の対象，ないし「文学作品」として個的に取り扱われている．しかし，上に述べたように，私は「演劇」としてこれを見ようとするから，これらは「一つ」の舞台の「三幕」として取り扱い，常に連動しているものとして取り扱う．その時何が見えてくるかというと，あらかじめ結論を述べておくと，この三部作はすべて，「舞台を支配している人物」には異同があるけれど，演劇の「論理」として，第一部の『アガメムノン』で夫アガメムノンを殺したクリュータイメーストラを巡り，クリュータイメーストラーを描くことによって一つの世界を提示しようとしている作品であるということになる．なるほど，『恵みの女神達』では彼女は冒頭で「亡霊」として現れてくるだけともみえる．しかし，ここでの主役，復讐の女神「エリーニュス」はクリュータイメーストラの「成り変わった」姿であるとも理解され，一般的なエリーニュスの概念からもっと凝縮された「人格性」を持ち，悲

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

憤と苦しみ，怒りが具体的であることを理解しなければならない．その論証は第三部を扱う時の問題となるが，要するに，演劇というものは観念的なものではなく，むしろ具体的な人物が具体的に演ずるものであり，テーマは一つであって，またそれが託されている人物も限定されて，「その人物のこと」として舞台は展開するものなのである．「幕」ごとに主人公が変わってしまうなどということは，オムニバス形式とかある種の意図によるもの以外，基本的にはない．したがって，この第二部『供養する女達』についても，表面上は，アガメムノンの遺子エーレクトラーとオレステスによる父の敵討ち，という舞台に見えながら，実際はクリュータイメーストラーの芝居であるということになる．

それはどういうことかというと，先ず，先入観を取り去ってアイスキュロスのテキストの場面で第一部の『アガメムノン』という芝居を見たとき，それは通常紹介されるような，凱旋した王が留守の間に不倫関係となっていた妻とその愛人に惨殺された，というような下世話な話しではなく，クリュータイメーストラーは女神アルテミスの正義を体現する形で，人間の本性的感情からして全く正当な怒りと怨念に基づき夫アガメムノンを殺していた，ということを先に示しておいた．彼女は非道な女でも何でもなく，むしろ強くもあり哀しい母でもあったのである．『アガメムノン』という芝居がそうなのだとしたら，その展開は，このクリュータイメーストラーの身の上がどうなるのかということ以外にはありえない．この第二部たる『供養する女達』はそうした意味で「クリュータイメーストラーの身に起きた事件」ということなのである．そして第三部の『恵みの女神達』というのは，その事件の評価とクリュータイメーストラーの落ち着いていく先，ということになるわけで，こうしてこそ「一つの芝居」としての論理が見えてくるのである．

つまり，この『供養する女達』はクリュータイメーストラーの夢見による恐怖から「供養」に派遣されたエーレクトラーと侍女達の場面から舞台が起こされてきて，エーレクトラーを描きながら「クリュータイメーストラーのその後」のことと「これから」のことが明示されて前半部が終わったのであった．その内容は，その後クリュータイメーストラーはアイギストスの妻となり，二人はうまくやっているようであるが，アイギストスは

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

アガメムノンの忘れ形見であるオレステスとエーレクトラーを当然迫害してきて，オレステスはアガメムノンの友人のところに亡命させられ，エーレクトラーは窮乏の生活を余儀なくされている現状の描きが第一点であった．ここに「哀れな王女」エーレクトラーが描出され，それを「救う」という形でオレステスが要望されることになったのが第二点であった．「仇討ち」というのはここから派生したかのような描き方で，エーレクトラーはそんなことはこれまで全く考えてさえいなかったことは先行論文で論じてある．ただオレステスの方は「家督の相続」に必要なこととしてアポロンに命じられて「仇討ち」にきたことは言明し，「敵」を欺くために「偽の伝言」を持って城中に入っていった．そこに「今の」クリュータイメーストラーが登場し，オレステスの死という偽の伝言に嘆く「母」としてのクリュータイメーストラーが描かれてきたのであった．これが文字通り真実の嘆きであったことも先行論文で論じてある．こういう「母」が描かれることによって，つぎに展開される事件の重みが増すのであって，この「母の嘆き」は必然の描写であったと言えよう．先行論文はここまでを示してある．ついで舞台はオレステスによる母の殺害となるわけだが，そこでオレステスの母殺害の正当性の弁明がなされ，それはひいてはアガメムノンの立場の弁明，つまり結果として「男の論理」「王の立場の主張」へと連なり，またアポロン達オリュンポスの神々が体現しているものと，クリュータイメーストラーの血から出現したエリーニュスの立場を明らかにし，「アガメムノン，オレステス，そして神アポロンの立場」と「クリュータイメーストラー，そして女神エリーニュスの立場」の相克の問題へと連なっていくのであった．これはもちろん第三部の主題となるわけであるが，本稿はその序章といった位置づけにあたり，「オレステスによる母殺しの弁明」の性格を明らかにすることにある．

母殺しオレステスの弁明

今，舞台はオレステスによるアイギストスの殺害が行われた．これについては観客は自分たちの知っている伝説の通りであるから，むしろワクワクした感情で見ていたであろう．本当のところは『アガメムノン』の論考

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

で示しておいたように，アイスキュロスの扱いではアイギストスは殺害の現場にも立ち会っておらず，アガメムノンの殺害には「相談に乗った」だけの存在であったのだが，それでもここで「同罪」とされてもこれはやむを得なかったろう．第一，彼はオレステスやエーレクトラーの窮乏の原因とされていたのだからオレステスによって討たれてもこれは十分に根拠はあるのであった．しかしこれは理屈で，そんなことより，実のところ多分観客は，たとえ他の詩人によってホメロスからはずれた筋立ての歌が作られていたとしても[3]，ホメロス以来の伝説の方が心にしみついていたのではないかと推察されよう．伝説というものは強く，だから後代の作家はむしろそれからはずれた物語をつくってみたりするわけで，しかしやはり伝説の方は揺るがないものである．したがって，ここでアイギストスが討たれるのはむしろ「あらねばならぬ」こととして要請すらされたであろう．問題はクリュータイメーストラーがどのように扱われるか，なのである．初演時の観客は，こともあろうにアガメムノンを殺したのが「伝説とは違って」「妻クリュータイメーストラー」にされてしまった芝居を見せられたばかりのところである．何がどうなるのかまだ何も分からない．オレステスはどうするのか．伝説通りならアイギストスを討つはずである．だがその後はどうなるのか．母まで殺すことになるのか．いやそんな恐ろしいことはできる筈はない．だとしたらどうなるのか．観客は錯綜した思いでこの芝居をみているはずで，だからこそ芝居として「面白い」のである．芝居というものは「面白く」なければ意味がないということもこれまでに論じてあり，それは「ギリシア悲劇」でも例外ではない[4]．観客は「固唾をのんで」舞台に見入っている．そして「伝説通り」のところまではきたのである．一応ともかくホットした感じはする，といったところが観客の反応であったろう．だからここの場面は問題がないとして，問題はこのアイギストスの死体に向かってクリュータイメーストラーが発するセリフからであった．この時彼女はアイギストスの死体に向かって

「ああ，何ということ．死んでしまったの．愛する人，アイギストスの命は！」893

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

とさけんでくる．この「愛する人 (philtate)」という言葉はさらにオレステスによって

「この男を愛しているのですか (phileis)，ならば同じ墓に横たえてやろう」894

という言葉に受け取られてクローズ・アップされてくる．ところでオレステスにとってはアイギストスは憎い敵以外の何物でもない．そのアイギストスを「愛している」ということはその愛している者も「憎い敵」とするわけで，それが実の母であれば一層「自分を裏切っている」と感じられることになり，「母憎し」の感情はより強く増してくることになるであろう．クリュータイメーストラーがここでアイギストスを「愛していた」というセリフを吐くことは，観客にとってはオレステスが母を殺していくその罪に対する「感情的な」弁明になってくるのである．なぜなら観客は，クリュータイメーストラーはオレステスよりアイギストスを大事にしている，と感ずるわけで，オレステスに対する同情の気持ちが起きてくるはずだからである．結論的に言っておくと，この「母憎し」の感情がオレステスによる「母殺し」の鍵となってくるのであって，このセリフからおきる舞台感情には十分に注意しなければならない．

しかも，「男」の立場からすると，妻は何があろうと「夫に追従」しているべきで，それが「貞節」なのだと思っている節がある．これは「一般的感想」ではなく，女であるエーレクトラー自身がクリュータイメーストラーを非難してそう言っていた（アイスキュロスがそう言わせていた）ことも先行論文で指摘しておいた．これはエウリピデスでの『エーレクトラー』でも同様であることもその論考で言及しておいた[5]．これはどうも，古代から今日まで変わらない「男の感情」であるようである．しかも，この感情は「男だけ」のものでとどまらず，「世間一般の感情」にまでなってしまうようで，だから夫の死後も一人でいる女性を「操を通す」などと称して讃える風潮があったし，今もあるようである．こんな風潮があるところに，どんな理由があったにせよ「夫を殺して」他の男に愛情を持つなどとは世間は許す筈もない．こうしてクリュータイメーストラーは憎悪さ

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

れるのである．一方でこの感情がオレステスにとって強い味方になるわけで，アイスキュロスがどれほどの意識をもってこうしたセリフのやりとりを描いたのかは分からないけれど，ともかく結果として，これから「母殺し」へと向かっていくはじめのセリフとして実にタイミングのいい「適切な」セリフが語られているといえるであろう．

こうしてオレステスは明確にクリュータイメーストラーに「敵対」してくる．ここでクリュータイメーストラーは，よく知られた場面であろうが，乳房を指し示しての「哀願のセリフ」となっていく（ちなみに，もちろん乳房は具体的にむき出しにされるわけはない．役者は全員「男」だから）．この時のクリュータイメーストラーの必死さは

「待って．ああ，息子よ (o pai)．これにおそれを．我が子よ (teknon)」896

と二度も異なった言葉で「我が子よ」と叫んでいることにも現れている．ここはどうもアイギストスを殺したのがオレステスその人であったことを始めて認知したような場面で，それゆえ久保訳は「待って，おお，そなたは，我が子！」と訳してきているが[6]，これは舞台の上から当然そうならねばならない場面である．なぜならクリュータイメーストラーは「オレステスは死んだ」と思い込まされていて，そこにアイギストスが殺されたということがあって，そして「今始めて」その犯人に出会った場面であり，そしてその犯人が伝言を持ってきた当の旅人であることを見て，こうしてやっと「事態」を覚って，ここにその犯人たる旅人がオレステスに違いない，と気が付き我が子と認知したわけであろうから．こうして「母と子」の情に訴えかけていくわけだが，これは母として当然の訴えであると同時に，観客にとっては「胸を打つ」セリフになっているであろう．今も指摘したように，伝説ではアガメムノンを殺したのはアイギストスであり，クリュータイメーストラーは，少なくともホメロスによるかぎり，当初は貞淑な女性であったのにアイギストスに籠絡されてしまったような女性になっている[7]．激しく「夫殺し」に向かったクリュータイメーストラーの凄まじい姿など「今始めて」見せられたのである．とまどいが観客の心を

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

支配していたであろう．だからここの舞台が「絵」になるのであって，とまどっている人々の心をさらに揺さぶってきているのである．したがってオレステスも観客の心そのままに友人のピュラデスに向かって

「ピュラデス，どうしよう．母を殺すことをおそれるべきだろうか」899

と言ってこざるをえない．ちなみに「おそれる」と訳した言葉は「aidestho」であり，これはクリュータイメーストラーが乳房を指し示しながら言った「aidesai おそれて」という言葉と同じで，詩的なリフレーンとなっているのだが，ニュアンスとしては「恥じる，畏れる，憚られる」といった感じで「母を殺すことが神をおそれぬ所行となる」という意味合いを持っている．当然のおそれであるわけで，それ故，これをくつがえそうとしたらやはり「神の名によって」決定的な理由を言ってくるのでなければならない．それを言ってくるのが有名なピュラデスのたった一回のセリフになるわけで，これについてはこの芝居に言及する者なら誰でも一言はコメントする位のものがあるわけだが，オレステスの傍らにずっといたにもかかわらず一言のセリフもなくて黙り役のように見えた人物のセリフであるから印象は非常に強いものになる．実際，見事なセリフ配置になっているわけで，そのセリフが

「何だって．ではこの先ロクシアス（アポロン）の予言は，ピュートーの神のお告げ，真実に誓われた宣誓は何処へ行ってしまう．神を敵とするよりすべての人を敵とした方がましだと思え」900

であったわけである．このセリフに関してマレーが「dh（それでは）」と読んでいたのに対してペイジは「dai」と読み，「何だって」としたのはここの舞台の雰囲気からして妥当であるだろう．つまりオレステスの「とまどい」を「意外」としているわけで，こうすることでオレステスの向かうべき道を強く指し示すことになるからである．つまり「神アポロン」がここで大きくクローズ・アップされたのであった．こうしてもはやオレステスにはその道しかない，ということが強調されていて，このことは観客に

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

もよく了解されたことであろう．観客は「母殺し」となっていくその所行を見ていくしかなくなってしまったことに，このセリフで教えられたのである．観客としては，伝説にあった「孝子オレステス」がこともあろうに「母殺し」になってしまうことに暗然としていたろう．

こうして舞台は「オレステスによる母殺し」へと向かっていくわけであるが，ピュラデスのセリフを承けていきなり「母殺し」になるわけではなく，ここから「オレステスの弁明」が具体的になされてくることになる．ここに，観客は，人が「母殺し」をするその「内的な」理由・根拠をみせられていくことになるのであった．つまり「アポロンの命令」というのは「外的」な理由とも言えるわけで，オレステスの「気持ち・感情」はまだ語られてはいない．ここからそれが見せられていくことになるのだが，ともあれ舞台でのオレステスの態度はさらに「敵意」をむきだしにしたものとなっていく．彼は母をアイギストスの死体の方へ引きずっていこう，というのだろう「来るがよい」と声をかけ，

「死んでもこの男と一緒に寝ているがいい．この男を愛して，愛さねばならない人を憎んだのだから」906- 7

と言ってくるが，ここでの「一緒に寝ていろ」という ksynkatheude という言葉はガーヴィーが指摘しているように「性的」な含みを持った語であり[8]，母に対して使うような言葉とはいえない．つまりここでオレステスはクリュータイメーストラーのうちに「母」を見るのではなく，憎き敵アイギストスの「情婦」を見ようとしているかのようである．ところで，観客の方はクリュータイメーストラーがどうしてアガメムノンを殺したのか，その理由は『アガメムノン』で十分に知らされているが，実はオレステスはその理由を知らない．彼は小さい時にクリュータイメーストラーによって友人のところに預けられている．それはどうもアイギストスに原因があるようなのは前半で語られていたが，ともかくそういうことだとすると，彼はただ「父アガメムノンは殺されている」ということくらいしか知識はなかったであろう．アポロンの命令があってこの地に戻ってくることになったとき事情を確かめたかもしれないが，せいぜい「アイギストスと

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

クリュータイメーストラーが共謀して，衣に絡め取って殺した」という情報が与えられたくらいであろう．事実は微妙に違っていて，クリュータイメーストラーが一人で彼女の手斧で殺したのだが，オレステスは，まさか女が一人で歴戦の勇士を殺せる筈もないと思い込んでいるのだろう，アイギストスがその刀で殺した，と思っていることは後のセリフで明らかにされてくる．それくらいの知識しかないわけだから，したがってオレステスはアガメムノンとクリュータイメーストラーの関係においても全面的に「父が被害者」だと思い込んでいるようである．ともかくアイスキュロスの筆はそうなっている．それゆえ，アガメムノンが「(夫として) 愛されねばならない人」だったと言ってくるし，以下もそうした「父の弁護」となってくる．しかし，あらかじめ指摘しておくと，オレステスの弁護は「男というもの一般」についての弁護であって，決してアガメムノンを「愛する父」として弁護するわけではない．考えてみれば当たり前で，オレステスは小さい時に別離したまま，ほとんど父を知らないで父と死別したのであるから「愛情」などあるわけもない．ただしアイスキュロスがそんなことまで前提していたと考える必要はない．アイスキュロスにとっては，「男というものの立場」が語られてくればいいのである．

一方，クリュータイメーストラーの方は，アガメムノンが「憎むべき男」以外ではなくなっていたから当然憎んで，そして殺した．『アガメムノン』の中で彼女は，弁解などしない，この私が私の手でこの男を殺した，と血を吐くようにさけんでいた．しかし一方，オレステスについては憎しみの対象であるわけもなく，その「死」についての情報に悲しんでもいた．もちろん，アイギストスが殺されたとの報告にあわてて手斧を取りにやらせる，ということはしているけれど，その時クリュータイメーストラーはアイギストスを殺したのがオレステスであると理解しているわけではなく，誰であるかは分かってはいない．だから，これは「オレステスに」ということより，「敵に」対しての備えという一般的行動であるといえよう．したがって，ここをもってクリュータイメーストラーがオレステスを敵対視していたとは言えない．そして今オレステスを目の前にして，その敵が誰であるかを理解し，そしてそれが「我が子」でしかもその子に殺されようとしている状況に，母としての感情が一気に吹き出してきたのであろう，

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

「この私がお前を育てたのだ. お前と一緒に年をとっていきたい」908

とさけんでくることになるのである. 母が子に向かって言う「本音の感情的セリフ」で, だから事実とは関係ない. 事実はオレステスは遠い異国で育っていたわけで, そんなことは全然意に介していないセリフである. だからオレステスもそんな事実をあげつらうことはせず,「父を殺しておいて」自分と一緒に住む気なのか, と切り返してくるのであった. 二人の感情のズレの交差がこうしたすれ違いのセリフとなって現れているのである.

こうした感情のズレをクリュータイメーストラーも感じ取ったのか, ここで彼女は哀願することを止め,「運命の女神 (Moira)」の為したことだと口にしてくる. これは観客には届いたセリフであったかもしれない. 観客はほんの少し前, いかにしてクリュータイメーストラーがアガメムノンを殺していったのかを見せつけられていたのだから. それはほとんど「必然」の成り行きであり,「騙され」「娘を殺された母」として,「夫に裏切られた妻」として「人間の本性的感情からして当然の」, そして冒頭で歌われたように「女神アルテミスの怒り」を体現したものであったのだから. しかも, アトレウスの一族に染みついた「血の呪い」までが王女カッサンドラーの幻影の中で激しく浮き立たせられ, アイギストスの弁明にまで語られていたのだから. このおぞましいアトレウスの所業については当時のギリシア人には身の毛がよだつ恐ろしいこととして, 切実に伝説に知っていたろうから余計である. しかし, 事情を知らないオレステスには届くわけもないセリフであろう. 彼にはただの言い訳としか聞こえないセリフであって, だからその同じ「運命」で命を落とすことになろう, と簡単に切って捨ててしまう. もはや絶望的である. クリュータイメーストラーは呻くように

「生みの母の呪いを, 我が子よ, お前はおそれないのか」912

と言ってこざるをえない. このセリフも当時のギリシア人には切実に届い

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

ているであろう．もちろん「復讐の女神エリーニュス」が意味されていることは誰でも分かったろう．古代ギリシア人にとっては倫理の根底にあるものとしておそれられていたものである．「母殺し」はこの根底の倫理に確実に触れるものである．つまりこのセリフは，うっかり思い込んでしまい勝ちな，単なるクリュータイメーストラーの脅しでも，捨てぜりふでも何でもなく，人間の行為の在りようを問うセリフとなっているのである．オレステスが心を翻すとすればこれしかない．したがって，オレステスがこれに応ずるには，同じく「父の呪い」を持ってくるしかない，と考えられそうなのだが，セリフは意外な展開を見せてくる．すなわちオレステスのセリフは

「生んだ者が私を不幸へと投げ込んだからだ」913

というものであった．つまり，自分の不幸に落ちた境遇が「エリーニュスをおそれない」理由として挙げられてきたのである．これは，「言い訳」など通用しないエリーニュスの凄まじい復讐の在り方からして，びっくりするような理由のあげかたである．しかしながら，これはここだけ見れば意外とも見えるが，しかし先行論文で指摘しておいたように，エーレクトラーやオレステスにとっては「自分の身の不幸」ということが一番の問題なのであった．ついうっかり，時代小説などで「仇討ち物語」にならされてしまっている者が考えてしまう「父の仇」というのは，ここでは付随的な問題でしかなかったのである．オレステスには「家督の相続」ということが問題であった．そうだとするなら，ここでもこうしたセリフが出てきて何ら不思議ではないであろう．論理的には「母の呪いをおそれない．なぜなら母が自分を不幸にしたからだ」ということになるわけだが，これがオレステスの本音なのであろう．オレステスの母殺しの弁明にこんな性格があったとは少々ガッカリする人もいるかもしれないが，人が「母を殺す」という極限の行為に走る理由は「建前」より「自分のこと」が優先するというのは，これは人間の行為の在り方の核心をついているのかもしれない．そしてこの意識的な問題化がエウリピデスにおいて為されていることも私の先行論文で示しておいたことである[9]．したがってオレステスは

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

重ねて自分の身の不幸を強調するように「自分は売られた」と叫んでくるわけであるが，これは事実とは違うからすぐクリュータイメーストラーに反駁されてしまう．

反駁されたところで，オレステスは母をなじってくるが，ここでクリュータイメーストラーはその非難を逆手にとるように

「同じように，お前の父のみだらさも口にしてみるがいい」918

と反論するが，ここはセリフのやりとりとして少々唐突な感じは否めない．しかし舞台の感情として，オレステスが母クリュータイメーストラーを責めている，ということは確実で，観客としてはクリュータイメーストラーの行為全体が責められているという感じがしたことであろう．これに対するクリュータイメーストラーの反駁なのである．ところで，ここで「みだらさ」と訳した言葉は「mate」であって，文字通りには「落ち度，愚行」といった言葉だが，マレーが「harlotry」と訳し，ガーヴィーも指摘するように[10]，ここは「性的放縦」を意味していることは次のオレステスのセリフにもはっきりしてくる．つまりこの言葉をきいただけですぐオレステスは，父が戦場から「女」を連れ帰っていたことを理解しているのである．したがって彼は

「苦労した父を責めるな，家の中で座っているくせに」919

と応じてくる．これはすでにアガメムノンだからとか何とかの問題ではなく，「男」の論理が語られていることは誰でも気が付く．そしてオレステスは続けて

「男の骨折りが家に座っている女を養っているのだ」921

と事をはっきりさせてくる．これは結局，「女は男に食わせてもらっているのだから，男の行動にとやかく言うな」というセリフに等しい．しかし

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

これが女に求められる美徳であって，これは当の女の口からも，これが「貞節」であると言われていた（言わされていた）のは先行論文で示しておいた．もちろん，本当に当時の女性達がそれを認めていたかどうかは別問題である．ただ，当時の社会倫理がそうであったということは確実に言えることである．クリュータイメーストラーはこのタブーを破った女性だったのである．彼女を悪人にしたければ，この点で責めることが出来，現代でも生きているこの男の論理が，彼女を「悪逆非道の女」という風評に作り上げていった一つの要因になっていると思う．オレステスもこの論理に従っているからクリュータイメーストラーを責めることができているのであり，オレステスの弁明にはこうした性格もあったのであった．

さらに，弁明としては強いと思われるセリフが語られてくるが，それはクリュータイメーストラーの

「いいかい．母の執念の犬どもに気を付けるがいい」924

というセリフに答えるもので

「これをしないでいたら，父の執念の犬からどうやって逃げられるだろうか」925

というセリフである．実際，それはそう思われたことであろう．ただし，ここで「犬」と言われているのは具体的にはエリーニュスで，この復讐の女神はクリュータイメーストラーの血からは出現するのにアガメムノンの血からは出現せず，そのことが後に問題にされてしまうのだが，しかし今はそんなことは分からない．オレステスにしてみればこれは不安であったろう．ただ，ここまできて，一つの不思議に気が付いてしまう．それはアポロンの存在で，ピュラデスに指摘されて「決意が固まった」とされていたのに，それ以降全然言及されないのである．私たちなら，オレステスが母を殺さなければならなくなった原因としてアポロンの命令が掲げられるのが一番分かり易い，というかその必然性が分かり易い．「神の命令」なのだからこれはどうしたってやらねばならない．ピュラデスが言っていた

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

通りである．なのにオレステスはその弁明の中でまったくそれに触れないのである．そして，この復讐の女神という「神」が相手から持ち出された場面ですらそうしていない．これはどうしてなのか．恐らくそれは，「アポロンの命令」を前面にだしてしまうと「オレステスの意志」がみえなくなってしまうからであろう．そして同時に「母殺し」というものが持っている罪の深さも見えなくなってしまう．確かにギリシア人にとって「人間の行為」の不可解さの根底に「神」を根拠としてみる，ということはある．しかし同時にギリシア人は「人間の意志」というものを強く意識する．例えば，非常に有名なその思想の典型を挙げるならば，ソポクレスの『オイディプス王』の最後近く，彼が目を潰した時のセリフを思い出してみるといい．彼は，こうした運命にしたのはアポロン，しかしこの目を潰したのは「私の意志だ」，とさけんでいる（1229 以下）．こうした思想はホメロスの英雄達の在り方にも現れており，だからこそ「行為の在りよう」というものが人間の問題として問われてくることになったのである．ここでもオレステスは「自分の意志で」母殺しをしていくことを引き受けていっているわけで，だからこの行為が問題となるのである．したがってクリュータイメーストラーもすべてが無駄と覚って

> 「ああ，この私はこんな蝮を生み育てたのだ，夢見から来たおそれは本当に予言者だった」928

と「オレステスの罪」を呻いてくるのであった．

結語　オレステスの弁明の性格

こうしてオレステスは「自分の行為」として母殺しを敢行した．しかし，以上のような「弁明」に基づいて行われた「母殺し」はどのような性格をもっているのだろうか．繰り返してその弁明を整理してみると，先ず前半部で「哀れな王女エーレクトラ」が描かれてオレステスはその救済者として嘱望された．その救済の具体的な行為は「敵討ち」となることをコロスが明示し，そして一方オレステスは「アポロンの命令によって」この故郷

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

に「正当な後継者」として帰還するために「敵討ち」をしに帰ってきたと言う．そしてアイギストスを討った．ここまでは良い．実際，前半の舞台でも確かにクリュータイメーストラーも非難はされていたけれど，エーレクトラーやオレステスの身の不幸の「元凶」はアイギストスにある，というような口振りであったのだから．そして事件の展開の大筋はホメロスなどの伝説と合致している．だから観客にとっては，ここまではよい，と思われたろう．さて問題はここからで，観客は今，アガメムノンの当の殺し手が，事もあろうに妻クリュータイメーストラーにされてしまった「生々しい舞台」を見せられたばかりである．相当に気分は動揺していたろう．そこに，芝居は伝説通り「オレステスの帰還」となっていった．どうなるのか．だが，芝居はともかく「アイギストスの殺害」という「知っている」伝説通りとなっていった．だからとりあえずは「安心した」．しかしその後はどうなるのか．なぜなら「本当の犯人」はクリュータイメーストラーなのだから．観客の置かれていた状況は大体こんなところであろう．ここで芝居はオレステスが「母をも殺す」という方向をとっていったわけである．観客としては「舞台の流れ」からして「そうなるのも成り行き」と思ったかもしれないが，一方，これが「母殺し」になってしまうことに大きなとまどいを感じていたであろう．さてアイスキュロスとしては，ここの「母殺し」にも半分の正義と半分の不正義が存在していることを訴えていかなくてはならない．そもそもアガメムノンのイーピゲネイアを犠牲にしてしまったことからはじまるこの一連の事件にはそうした性格があるということは先行論文で指摘してある．そしてクリュータイメーストラーの「正義に基づく行為」を『アガメムノン』で描いてみせた．しかし，ここに「王の殺害」および「王位の簒奪」という重大な罪があることが長老達によって激しく糾弾されたのであった．それが『アガメムノン』で「明示」されていた不正義であったが，もちろん人間感情として「夫殺し」ということもその「罪」の中には暗黙的に含まれていたろう．

ここでオレステスであるが，彼の「正義」の行為はこの「王位の復権」ということがまず第一であった．これが彼の正義の第一であったからアイスキュロスも再三これを主張させていた．なぜなら彼が「嫡子」であり，正式の「王位後継者」であったからである．しかし，これだけの正義なら，

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

彼はアイギストスを討つだけで良かったはずである．クリュータイメーストラーについては「裁判にかけて追放」にすればすんだのであり，それは実際，エウリピデスの『オレステース』の中で主張されていることであった（500）．当時「追放」というのは死刑と同等くらいの重いものであったことは『オイディプス』がよく語っている．「流血」が憚られる時にはこの手段をとればよいのである．だからオレステスの場合にも，エウリピデスが主張しているように，この手段をとれたはずなのである．しかしそうはしなかった．それゆえこれが大きな問題となる．そして，その「母殺し」の根拠となる正義が一つには「当時の社会倫理」つまり「女（妻）は男（夫）に服従しているべし」とする倫理で，オレステスはクリュータイメーストラーがこの倫理を犯している，としたのが弁明の大きな要素となっていた．一方この倫理というものは当然「善・悪」の感情とつらなり，それはさらに「好・嫌」の感情とつらなる．自分が「よし」としている倫理に反するものは「許せない」という感情になるのは人間の常であろう．それ故，理由は問わず，「夫（男）を殺した女」ということで極刑が要求されると思われているようである．オレステスの父アガメムノンに対する気持ちはここ，つまり「夫の立場，男の立場」での弁明にしか描かれていない．だから，これだけでは足らない，と思われたのであろう，強調されてきたのが，「母に捨てられた」とするオレステスの個人的感情であった．「母は敵アイギストスを愛し」「自分を遠い異国に売った」「そして自分を不幸にした」とする感情である．

舞台でのオレステスが口にしてきた「母殺し」の彼自身の「意志に基づく」行為の弁明は以上につきる．繰り返せば，「王位の奪回」「当時の男性優位の倫理観を犯したものにたいする悪感情」「母に見捨てられたとする自分の不幸の感情と憎しみ」とである．そして「表」にかかげられたのが「アポロンの命令」であった．しかしこの「表看板」は看板だけに大きくて目に付きやすく，つい騙されてしまいがちだが，実のところは「オレステスによっては」強調される弁明とはなっていなかった．だとしたら，この「感情」こそが「母殺し」へと突き進ませた元凶であったと言わざるを得なくなるであろう．アポロンの命令というのは一見強い動機とみえながら，これは「外側」からの強制であって，「内的な」動機とは違う．オレ

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

ステスは「外的」強制によって「泣く泣く」母を殺したのではない．それを盾にしながら，彼はみずから進んで「殺す」動機をもって殺しているのである．その「内的」な動機が今見た「憎しみの感情」であったのである．だから，彼は母を殺した後，自分を弁護するように，アガメムノンが殺された時の血染めの衣などを広げて見せているが，それは自信に満ちた態度ではなく，忸怩たる思いのものであり，それゆえに立ち昇ってくるエリーニュスの幻影を見ていかなければならなくなるのである．オレステスは一見「父の仇」を討った「孝子」とみえる．しかしそれはそうではなかったのであり，彼は「自分の感情」に突き動かされて「母殺し」へと邁進していたのである．これが彼の「罪・不正義」だったのである．かくして彼は，この正当な「罰」としてエリーニュスに追われることになる．彼の「罪」からしてこれは「正当な」母クリュータイメーストラーからする仕打ちなのであり，そして女神エリーニュスが至当としたものなのであった．しかし一方，彼の「正義」の方はどう評価されなければならないのか，という問題がのこる．これが問題となるのが第三部ということになるのである．

さて，本稿は三部作全体を問題にしながら「オレステスの弁明」の性格を見，三部作全体の解釈の一助とするものだが，以上でとりあえずその目的は果たされたとしておこう．ただし完全には第三部が取り扱われなければ完了とはならないが，しかし，観客も今のところはここまでしか観ていないものとして，これからのことは期待をもって観ていくものとし，本稿もここまでのところとしておきたい．

了

注

1) 拙稿「嘆きの王女エーレクトラー，アイスキュロス『供養する女達』の舞台」，『岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）』18，第45巻，第2号，1997.
2) 拙稿「怨の母クリュータイメーストラーの行く道，ヒロインのギリシア悲劇，アイスキュロス『アガメムノン』の舞台」『エーゲ海学会誌』，第10号，1996.
3) これについてはA. E. Garvie, *AESCHYLUS Choephori*, *Introduction* が詳しい．また岩波版の『ギリシア悲劇全集』，アイスキュロスの『アガメムノン』に付けられている久保先生の解説も参照．
4) 拙稿「プラトンとギリシア悲劇」，『岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）』，第

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

44 巻，第 2 号，1996.

5) 拙稿「エーレクトラーはどうして母を殺したか，エウリピデスのエーレクトラー考」，『岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）』，第 46 巻，第 1 号，1997.

6) 岩波版『ギリシア悲劇全集』第 1 巻，p. 176.

7) 『オデュッセウス』での第 3 歌，pp. 253- 275 など．一体にホメロスでは彼女の影が薄いことは誰もが指摘するとおり．

8) 前掲書の当該箇所に付けられている注参照．

9) 前掲の拙稿．

10) G. Murray, *The Complete Plays of Aeschylus*, p. 177. また，ガーヴィーについては前掲書の当該箇所の注．

NII-Electronic Library Service